

第十回総会を開催

◇ 横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は第十回総会を平成七年十一月五日午後二時から、善光寺「釈迦殿」で開催した。

善光寺育英会は昨年一月に第十一回生五人の採用を決定。これにより育英生の総数は関係国十六カ国・一地域、六十一人にのぼった。

総会に先だって、本堂で開会諷経と故・前角顧問の追悼法要が黒田理事長の導師で営まれた。法要後、東隆眞理事（駒沢女子大学副学長・学

長代理）が講演し、戦後五十年の日本を取り巻く内外の情勢を分析しつつ、仏教者としていかに生きるべきかを語り、新時代にふさわしい人材が育英会の中から育つことへの期待を述べた。

東理事は「戦後五十年をどう反省し、これらの五十年に向けてどう生きてゆくべきかが、あらゆる角度から問われている」とし、安定を欠いた世界情勢や、日本国内の兵庫県南部地震やオウム事件などを挙げて「世界は混沌として不透明であり、不安定だ。天災、人災その他、予想もしない事が起こっている。宗教界ではオ

ウム事件を契機にして宗教法人法改正の是非、また宗教とは何か、仏教とは何かが根底から問われている」と直面する現実の深刻さを指摘。

その上で「私どもは自分の足元を見つめながら、互いに仲良く生きていく生き方、世界平和の原理は、仏教を具体的にどう実現するかにあることを考えなければならぬ」と提言。

「私どもは、この育英会を通じて信仰の友人をもっている。その喜びを多くの人に伝え、世の中の安定と平和に尽くすことができればと願う。国際的な感覚をもった、活力に満ちた若い仏教学者や僧侶の育成が緊急の要件であろう」と所信を披瀝した。

また曹洞宗南米開教総監の大任を果たし終えてブラジルから帰国した森山大行前総監は、「開教総監の仕事を通じて、黒田理事長の蒔いた種が世界各地で芽をふいていることを肌身で感じた。各国の若い留学僧の方々が育英会から育つ

ていることに強い感動を覚えた」と育英会の果たしている役割の重大さを話した。

引き続き総会が開かれ、善光寺の富永豊重総代と越石周平護持会長が挨拶。宮本延雄理事（鶴見大学学監）は仏法興隆・世界平和の高邁な理想を掲げた善光寺育英会が希有の存在であることを力説し、「育英生の論文も素晴らしいが、推薦される方々の推薦文はもっと素晴らしい。この育英会がいかにも素晴らしいかを物語っている。また育英会に往復の旅費が交付されるような奨学制度は他にないだろう。今後続く方々のために、この育英会を育てていただきたい。そして我々を叱咤激励していただきたい」と訴えた。



新美昌道事務局長（東京・福厳寺住職）を議長に選出して議事が進められ、まず黒田理事長

が出席者を一人ずつ紹介。議事は平成七年度の行事及び会計報告、第十二回育英生辞令交付式および記念講演と開山忌の件、仏教文化総合講座開設について、出版事業に関する件、その他が話し合われた。

行事報告では、とくに故・前角顧問の密葬と本葬、また東理事と黒田理事長が追悼取材のためアメリカの禅センターを訪問した様子が報告された。その中で東理事は、前角顧問の法嗣のグラスマン・徹玄師が仮称「マエズミ・クロダ大学」という仏教主義の大学を設立する構想を描いていることを発表した。

第十二回育英生は一月に採用を決め、二月十七日の開山忌に辞令交付式並びに記念講演を行うことに決定。また育英会の行事として、新たに仏教文化総合講座の開設が提案された。機関誌『成寿』第二十五号は駒沢女子大学と前角顧問追悼の特集号とすることや、育成生の論文

集第二巻が年内に刊行されることなども報告された。

また、善光寺育英会の名誉顧問であるタイ国ワットパクナムの任職、プラタム・パンヤー・ボディー大僧正が十二月五日、タイ国王から最高位の「ソムデット」に任命されることが朗報として発表された。ワットパクナムは黒田理事長が青年時代に修行した寺で、大僧正とは親子のように親しい関係にある。

総会后、出席した育英生OBの岩波弘道（第三回生）曹洞宗宗務庁書記）、島崎義孝（第三回生）臨済宗・花園大学非常勤講師）、安藤嘉則（第六回生）曹洞宗・駒沢女子短期大学講師）の三氏が前角博雄顧問を偲んで、それぞれ卓話を行った。

その中で、岩波氏は「前角老師には、そっけないような印象を覚えたが、実は忍耐の人ではなかったかと思う。たったひとこと言うだけで、

あとはその人が育つのをずっと待ち続けていたのではないか」とその人柄を回想。

島崎氏は「苦勞をしてこられた方だと感じた。アメリカでは曹洞とか臨済にとらわれず、ここにある自分は何かを真剣に問うておられた。老師は忍耐が柔らかい形で出ていることを感じた。老師は果たして日本人だったのだろうか、アメリカ人だったのだろうか、あるいはコスモポリタンだったのだろうか。社会学で境界人という言葉があるが、老師はそのような人だった。老師は実父と苧坂光龍老師と安谷白雲老師の三人を師とされたが、私にとっては実父と故・盛永宗興前花園大学学長と前角老師が師である。二人の師を失ったことを私の慈悲と受けとめる。もう私を助ける人はいない。己の足で歩けということかと納得しかけている」と、失った人の存在の大きさを語った。

